

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	高田 公
論文題目	中東欧体制移行諸国における金融システムの構築 －銀行民営化と外国銀行の役割を中心に－		
(論文内容の要旨)			
本論文は、経済体制の移行を行った中東欧諸国における金融システムの発展の方向性について、特に金融システムのなかで重要な位置を占める銀行部門に焦点をあて、銀行制度の形成に影響した要因とそこでの主体の役割などを詳細に検討している。中東欧諸国の銀行部門に共通して生じた顕著な特徴は銀行部門の大部分が外資系銀行に占められるという現象であったが、そのプロセスは同じEU新規加盟国間でも異なったものであった。本論文は、中東欧諸国の特殊性を考慮し、銀行民営化と外国銀行の役割を中心に、受入国と経済制度の視点から金融システム像を実証的に明らかにするとともに、外国銀行と世界経済危機の伝播との関係まで検討している。本論文の研究方法上の特徴は事例研究を通じて課題に接近した点にある。市場経済化の過程における銀行部門民営化の過程を事例研究として分析することにより、各国の具体的・個別的な状況において働いた様々な要因を理解することが容易になる。 第1章は、本論文の議論の背景となる中東欧諸国の移行に関する議論を概観するとともに、銀行民営化と外国銀行参入に関する先行研究の整理を行なっている。体制移行諸国では民営化が国有銀行の効率性の改善をもたらすとは限らないこと、外資系銀行が他の所有形態の銀行に比べて費用効率的であることが示されている。外国銀行の参入に関して、受入国からの視点が欠落していることを強調している。 第2章は、中東欧3ヵ国ハンガリー、チェコ、ポーランドの銀行部門民営化過程の比較分析を行うとともに、外国資本家への売却方式がとられる要因を、国有銀行問題、EU加盟交渉、外国銀行の経営戦略の3点から考察している。体制移行開始当初、異なる銀行民営化政策がとられ、形成された銀行部門構造も多様であったが、銀行民営化方式が外国金融投資家への売却方式に収斂したことにより、共通して外国資本が銀行部門の大部分を占めるようになった。この現象は、銀行部門を急速にEU基準へと適応させた結果であると同時に、グローバル化と地域統合の中で中東欧市場への進出を強める外国銀行の経営戦略が補完的に作用したと主張する。 第3章は、中東欧諸国で唯一外国銀行が支配的ではないスロヴェニアの銀行部門を検討している。銀行部門の民営化はEUへの加盟交渉において一つの課題となっていたが、スロヴェニアの政治的状況が外資に反発的なものとなり、その一方で政治的な判断が強く働いた加盟交渉では銀行民営化が問題視されることはなかったと主張している。 第4章は、2008－2009年の欧州新興国における金融危機の展開および危機の救済策と、中東欧諸国の銀行部門における外国銀行の支配との関係を考察している。本章は、欧州新興国の危機において、西欧の銀行は中東欧諸国の銀行部門に安定性をもたらす一方で、新たなリスクを発生させていることを論じている。すなわち、外資系銀行は、そ			

の本国が危機的状態にある中で、通常時のような銀行部門における安定性の役割を果たすことができなかっただけでなく、その外資系銀行が本国の危機を伝播した上に、多数の受入国のリスクが逆に西欧の銀行およびその本国に集中する危険性が生じたことを述べている。これに対し、国際金融機関を中心とした流動性危機回避の取り組みが重要な役割を果たしたと主張している。

最後に、本論文の意義も指摘しておく。第1に、これまで別々に研究されていた外国銀行参入の研究と銀行民営化政策研究を橋渡しすることにより、外国銀行の参入理由および銀行部門における外国銀行の役割が理論的・実証的に考察されている。第2に、体制移行における市場経済の構築に銀行部門が与える影響、銀行部門に外国銀行の支配をもたらした要因が検証されることで、市場経済移行論に新しい視座を提供し、それはCI S諸国など他の諸国の研究にも有効である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、中東欧諸国における銀行民営化と外国銀行の役割に焦点をあてて、市場移行に伴う金融（銀行）システムの構築および経済危機の伝播経路を実証的に明らかにした意欲的な研究論文である。豊富な研究資料を渉猟した接近方法は言うまでもないが、本論文の学術的貢献は以下の点において高く評価することができる。

第1に、市場経済移行とEU東方拡大のプロセスを金融システム・金融制度の側面から詳細に描き出し、形成された市場と制度構築の特徴が明快に論じられている点である。中東欧4ヵ国（ハンガリー、チェコ、ポーランド、スロヴェニア）における金融システム構築過程が詳らかに検証され、1990年代後半期以降制度の収斂が生じていること、それにもかかわらず唯一スロヴェニアは国内資本に依拠した全く異なった制度構築に走ったことが対照的に論じられている。制度の収斂を加盟の要件とするEU東方拡大だけが注目されがちであるが、初期に多様化をもたらした経路依存的な制約要因と初期条件が拡散と収斂の両方をもたらしたとする主張は、市場移行当初の段階に行われた実証研究に対する接ぎ木の役割を果たしているとともに、移行政策のひとつとして限定的にとらえられがちな金融制度の概説的な研究を批判し、金融の担い手と制度形成が市場経済移行を規定するものであることを説得的に論じている。このような主張は、EUにおける金融システムの統合化の困難さを明らかにするものであり、EU経済統合論にとっても示唆に富む結論になっている。

第2に、多国籍銀行・外国銀行に関する国際的な議論を整理しながら、外国銀行を銀行民営化と結びつけて受入国の視座から比較・実証研究することで、外国銀行の経営戦略を内と外の両側から説得的にとらえるとともに、受入国における金融システムの制度選択というきわめて野心的な課題にまで接近している点にある。社会主義時代の金融システムとその変遷が制度選択上の制約要因として丹念に検討され、市場移行諸国は総じて銀行による資金調達に傾斜した制度構築になったこと、外国銀行の型そのものが受入国の金融制度面に影響していることが明らかになる。

第3に、世界経済危機が欧州に飛び火する中で、危機を伝播する経路を外国銀行および金融システムにおいて明らかにした点は、世界経済危機に関する研究にも貢献するという意味で貴重であり、かつ他の研究論文にないオリジナリティをもつ論文に仕上がっている。対象国での信用の急速な拡大と少数の親銀行に集中したリスクの大きさを論証し、危機に対して国際的な協調介入の有効性を導きだしている。この結論は、欧州における経済政策研究に欠かせない視座を提供している。

一方、本論文には、以下のように今後取り組むべき研究課題が残されている。

第1に、銀行民営化と外国銀行に絞り込んで金融システムを考察することで、対象が銀行制度だけに傾斜することになり、金融システムの全体像を十分に描き切れていない。証券市場を含めて資金調達・資金の流れが総体として分析されることで、論文の完成度、すなわち金融システムの制度研究に精巧さが加わると考えられる。第2に、初期条件を制度選択の基盤におくというオリジナリティを確かなものにするうえで、その歴史的な条件を20世紀初期にまで広げて考察する必要性が指摘されよ

う。第3に、対象諸国の市場像と金融システムを関連づけて論証することにより、経済システムの多様性が再考されなければならないだろう。

以上のような課題を残しているとはいえ、それらは将来に向けた研究の発展のための方向性を示唆したものであり、本論文が解明した貴重な学術的貢献を何ら損なうものではない。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成23年4月26日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。